

『フィリピの信徒のみなさんへ』私訳

阿 部 包

この手紙は、新共同訳聖書¹では「フィリピの信徒たちへの手紙」という表題になっている。執筆されたのは獄中とされるが、それが具体的にどこかについては、これまで、エフェソス、カイサリア・マリティマ、ローマの三つの説が唱えられてきた。執筆時期は、それぞれ順に 54～55 年頃、58～60 年頃、60～62 年頃となる。しかし、このうち、可能性が最も高いのは、エフェソス説であろう。

パウロがマケドニア州のフィリピを最初に訪れたのは、第二回宣教旅行の際（50 年ころ）であった。使徒言行録によれば、きっかけはミシア州のトロアスで彼が見た幻であった。その幻の中で「一人のマケドニア人が立って『マケドニア州に渡って来て、わたしたちを助けてください』と願った」（16 章 9 節）。そこで、パウロは、同労者シラスとおそらくルカを伴って、トロアスを船出し、サモトラケ島を経てエーゲ海北部を渡り、ネアポリス（現在のカヴァラ）に到着した。それから、彼らはエグナティア街道を通して目指すフィリピに入り、ヨーロッパで最初の福音の種を蒔き、最初の信徒の群れを獲得したのであった。町外れの川岸にある祈りの場で最初に行なった宣教とその結果や、その後には彼らを見舞った投獄と突然発生した大地震をきっかけとする新たな信徒獲得など、フィリピでの出来事については、使徒言行録 16 章 11～40 節にルカの手で描かれている。

その中から、ここでは、フィリピ教会の誕生について、書いておこう。通常、パウロは安息日にシナゴグへ出かけて、そこに集まっているユ

¹ 共同訳聖書実行委員会『聖書新共同訳—旧約聖書続編つき』日本聖書協会、1987 年。

グヤ人や異邦人改宗者、そしてユダヤ教に共鳴する異邦人に福音を伝えるのであるが、フィリピで彼が赴いたのは川岸にある祈りの場であった。和田幹男神父も書いているとおり²、ディアスポラの地にあるユダヤ人は、シナゴグがない場合には、しばしば川岸や海辺に集って祈ったようである。パウロが町の門を出て、川岸にあった祈りの場へ出かけたのは、祈りをささげるためにそこに集まっていた人々に、イエスこそメシアであるという福音を告げるためであった。そこで福音を受け入れたリュディアという女性は紫布の商人で、「神をあがめる婦人」(sebomenē ton theon, 16章14節)と呼ばれている。先の区分に従えば、ユダヤ教に共鳴する異邦人女性であった。紫布の商人(porphyrōpolis)が扱う「紫布」(porphyra)は高価な商品である。彼女の暮らし向きは、比較的裕福だったはずだ。彼女の自宅がヨーロッパ最初の「家の教会」となった。

ところで、この手紙は、とりわけ、2章6～11節に収録されている「キリスト賛歌」によって名高い。この部分は、初代教会の信徒たちが歌った賛美の歌をパウロが引用したものと考えられている。

また、この手紙は元来一通のものとして書かれたわけではなく、通常三つに区分される。手紙A(1章1節～3章1節)、手紙B(3章2節～4章1節)、手紙C(4章2節～23節)である。しかし、いずれにしても、それぞれの執筆時期の隔たりはそれほど大きくはなく、A、B、Cの順に、54年後半から55年にかけて執筆されたものと思われる。ちなみに、手紙Aは、その特徴的な内容のゆえに「喜びの手紙」とも呼ばれてきた。

手紙Bの主張からも明らかなおおり、エルサレム教会の一部の宣教者たちによるユダヤ主義的理解の影響が、遠くこのヘレニズム都市であるフィリピにも及んでいた。パウロは、反対者たちを「あの犬ども」³とさえ呼んで、その割礼の強要や肉によるイスラエルへの帰属の誇りを反駁し、ローマやガラテヤ同様「キリストの信仰による義」を主張する⁴。

また、パウロは、反対者たちが強調するこうした誇りに対して、彼自

² 『聖パウロ — その心の遍歴 —』女子パウロ会、1996年、103～104頁。

³ 手紙Bの冒頭、3:2節、参照。

⁴ ローマ3:22(3:21～26、参照)、5:1～2;ガラテヤ2:16, 3:22;フィリピ3:9、参照。

身の出自や育ちについて、反対者たちを凌駕する「資格」を次のように列挙する。「(わたしは) 生後八日目に割礼を受けた者、イスラエルの民、しかもベニヤミン族出身の者、ヘブライ人の中のヘブライ人、律法という点ではファリサイ人、熱心さという点では教会を迫害する者、律法に基づく義という点では非難されるところのない者です。」⁵

「貸借勘定」、「貸勘定」、「受け取り済み」などの商業用語が使われていること⁶も、また、この手紙の特徴の一つであろう。

フィリピの教会(信徒たち)は、ガラテヤやコリントと比べると危機的な状況というほどの問題を抱えてはいなかったようであり、パウロとの関係も極めて良好だったようである。自分たちの教会の生みの親とも言うべきパウロの苦境を一度ならず救って、彼の苦しみを分か合った信徒たちを、パウロも特に想起して描いている⁷。パウロにとって、彼らフィリピの信徒たちは、「愛する、慕わしい兄弟」であり、「わたしの喜びであり冠」であった⁸。

翻訳に際して心がけたのは、これまでどおり、主として、原文のコイネー・ギリシア語本文⁹と対照しながら読んで分かり易いこと、日本語としても自然に論理展開を追うことができること、である。訳注はページ毎の脚注形式で付すが、必要最小限にとどめる。

⁵ フィリピ 3:5~6。

⁶ それぞれ、4:15, 17, 18, 参照。

⁷ 4:14~15, 参照。

⁸ 4:1, 参照。

⁹ NESTLE-ALAND, *NOVUM TESTAMENTUM GRAECE*, Ed. XXVII, Deutsche Bibelgesellschaft, Stuttgart, 1993.

フィリピの信徒のみなさんへ¹⁰

1

〈挨拶〉

1 キリスト・イエスの僕¹¹、パウロとティモテオスから、監督者や世話人たち¹²とともにフィリピにいて、キリスト・イエスの内にあるすべての聖なる人々へ。2 あなたがたに恵みと平安が、わたしたちの父である神と主イエス・キリストから¹³ (ありますように)。

〈フィリピの信徒たちのための祈り〉

3 わたしは、あなたがたを思い起こす度に神に感謝し¹⁴、4 あなたがた全員のためにわたしが祈る度に、いつも喜びをもって祈っています。5 それは、あなたがたが最初の日から今に至るまで、福音に共に与ってきた¹⁵ からです。6 わたしは確信しています。あなたがたの内にあつて善い業を始めてくださった方が、キリスト・イエスの日¹⁶ までにそれを完成し

¹⁰ PROS PHILIPPĒSIOYS。直訳では「フィリピの人々へ」。「フィリピのみなさんへ」あるいは「フィリピの信徒のみなさんへ」が妥当だろう。協会訳、フランシスコ会聖書研究所訳は「フィリピ人への手紙」。新共同訳は「フィリピの信徒への手紙」。

¹¹ 「神の僕」という自己認識は、ユダヤ的伝統の枠組みの延長線上にある。同じくは、ローマ1:1にも出る。旧約聖書では、ネヘミヤ1:6, 11; 詩編19:11, 13; 27:9, 31:17ほか。

¹² 「世話人たち」は、diakonoisの訳。「奉仕者たち」(新共同訳)、「奉仕者のみなさん」(フランシスコ会訳)、「執事たち」(協会訳、バルバロ訳、新改訳、青野訳)、「執事の方々」(前田訳)、「世話役(司教)」(本田訳)など。ただ、「監督」にせよ「奉仕者」「世話人」「執事」にせよ、まだ職制として確立してはいなかった。

¹³ 2節と同じ表現は、ローマ1:7にも出る。

¹⁴ 1テサロニケ1:2, ローマ1:8, 参照。

¹⁵ 原文のニュアンスをすっきり日本語に移し替えるのは難しい。「共に与ってきたから」は、epi tēi koinōniāi, 「福音に」は eis to euangelion, ともに前置詞句である。「互いに協力し合って、皆が福音の内に留まりながら歩んできた」ということ。

てくださるであろう、と。

7 わたしがあなたがた全員について、こう思っている¹⁷のは当然のことです。というのは、わたしがあなたがたを心に留めているからです。つまり、わたしが投獄されているときも、福音の弁明と立証をするときも¹⁸、わたしはあなたがた全員をわたしと共に恵みに与る同志だと思って来たからです。8 わたしが、キリスト・イエスの憐れみの心¹⁹であなたがた全員を慕わしく思っていることについては、神がわたしの証人です²⁰。

9 また、わたしは次のように祈っています。あなたがたの愛が、認識においてもどんな経験知においても、なお一層豊かに満ち溢れ、10 あなたがたが大事なことがらを判別できるように²¹。こうして、あなたがたがキリストの日に²²、清らかな者、咎められるところのない者となり、11 イエス・キリストをとおして（与えられた）義の実²³を一杯に実らせて、神の栄光と誉れが表されますように²⁴。

¹⁶ 1：10；2：16， 1コリント1：8， 1テサロニケ5：2， 参照。また， 1テサロニケ3：13も参照。

¹⁷ 「こう思っている」は，*touto phronein* の訳。パウロはこの手紙で *phroneō* 「思う」という動詞を多用している。

¹⁸ 直訳は、「わたしの投獄に際しても、福音の弁明と立証に際しても」。ギリシア語は日本語より遥かに名詞的表現を好む。ちなみに、この手紙は、パウロが獄中にあったときに書かれたと考えられるため、「獄中書簡」とも呼ばれる。

¹⁹ 「憐れみの心で」は，*en splanchnois* の訳。もちろん、隣人愛のキーワード「深く憐れむ」(*splanchnizomai*)と同根の言葉。

²⁰ ローマ1：9， 参照。

²¹ ローマ2：18， 参照。

²² 「キリストの日に」は，*eis hēmerān Christou* の訳。同じ表現は2：16にも出ている。

²³ 「義の実」は，*karpos dikaiosynes*（ここでは、その対格形）の訳。内容的に、ガラテヤ5：22に出る「霊の実」(*ho karpos tou pneumatou*)を思い起こさせる。

²⁴ 「一杯に実らせて」は *peplērōmenoi*（男性分詞，複数主格）の訳，「神の栄光と誉れが表されますように」は *eis doxan kai epainon theou* の訳。

〈わたしにとって、生きることはキリスト〉

12 そこで、兄弟のみなさん、あなたがたに知って欲しいと思います。わたしの身に起こった出来事は、むしろ福音の前進をもたらしたのです。13 すなわち、わたしの投獄がキリストのためであることが²⁵ 総督官邸全体に、またその他すべての人々に知れ渡り、14 主にある兄弟たちの多くがわたしの投獄によって確信を強め、ますます勇敢に、恐れることなく御言葉を語るようになったのです。15 ある者たちは妬みや争いから、またある者たちは善意から、それぞれキリストを宣教しています²⁶。16 わたしが福音の弁明という使命に定められていることを知って、愛のゆえにキリストを告げ知らせる者もいれば、17 他方、利己心からそうする者もいますが、彼らは不純な気持ちで、わたしの投獄生活にいつそう苦しみを呼び覚まそうとしている²⁷ のです。

18 しかし、それが何でしょう。とにかく、どんな方法であれ、口実にせよ、真実にせよ、キリストが告げ知らされているのですから、これをわたしは喜んでいます。

否、これからもわたしは喜びます。19 というのは、あなたがたの祈りとイエス・キリストの霊の支えとによって、このことがわたしにとって救いになると知っているからです。20 それは、わたしの切なる願いと希望に基づくものです。つまり、わたしはどんなことも恥とせず、むしろ、全く公然と、いつものとおり今も、生きるにしても死ぬにしても、わたしの体においてキリストが崇められるようになってほしいのです。21 実際、わたしにとって、生きることはキリストであり²⁸、死ぬことは利

²⁵ もう一つの翻訳の可能性は「わたしの投獄が……キリストにあって知れ渡り」であろう。

²⁶ 原文の語順を尊重して訳したが、むしろ「妬みや争いからキリストを宣教する者もいれば、善意からそうする者もいます」の方が日本語としては自然だろう。

²⁷ 「いつそう……呼び覚まそう」と訳した単語は *egeirein* (不定詞) である。もちろん、「立ち上がらせる」「復活させる」を表す動詞でもあるが、ここでは、苦しみを「嵩じさせる」「増し加える」という意味である。

²⁸ 「わたしにとって、生きることはキリストであり」は、*Emoi (gar) to zēn Christos* の訳。やはり、「もはや、わたしが生きているものではありません。

益なのです。22 しかし、もし、肉にあって生きることになっても、それはわたしにとって働きの実り²⁹ となりますから、どちらを選ぶべきかわたしは分かりません。23 わたしは、二つのことの間で板挟みになっています。世を去ってキリストと一緒にいたいという切望をわたしは抱いていますが、それはこの方が遥かによいからです。24 しかし、肉にとどまる方があなたがたのためにはそれよりもっと必要なことなのです。25 そして、このように確信していますので、わたしは生きながらえて、あなたがたの前進と信仰の喜びのために、あなたがた全員のもとに滞在することになると知っています。26 そうなれば、キリスト・イエスの内にあるというあなたがたの誇りは、わたしによって、わたしが再びあなたがたのところに滞在すること³⁰ によって、満ち溢れるでしょう。

27 ただキリストの福音にふさわしく生活しなさい³¹。そうすれば、行ってあなたがたに会うにせよ、離れているにせよ、わたしはあなたがたについて次のように聞けるのです。すなわち、あなたがたが一つの霊の内に堅く立ち、心をつにして福音の信仰のために共に戦っているのだと、28 また、敵対者たちのどんな脅しにあってもたじろぎはしないのだ³²と。このことは、彼らにとっては滅びの徴ですが、あなたがたの救いの徴³³でもあります。これは、神によることです。29 なぜなら、あなたが

わたしの中でキリストが生きているのです」(ガラテヤ2:20)という言葉が思い起こされる。召命体験以降、パウロの生の主体はキリストになった。敢えて通俗的な表現を使えば、パウロにとっては、寝ても覚めてもキリストしかないのである。

²⁹ 1コリント9:1~2, 参照。

³⁰ 「滞在すること」と訳したのは、parousia「居合わせること、臨在、到来」。

³¹ 「生活しなさい」と訳したのは、politeuesthe<politeuō「市民として生活する、市民生活を送る」。もちろん、語源は、polis「都市、都市国家」。

³² 「敵対者たちのどんな脅しにあってもたじろぎはしないのだ」は、mēptyromenoi en mēdeni hypo tōn antikeimenōn「どんなことにおいても、敵対者たちから脅されてたじろぎはしない」の意識。

³³ 原文では、当然「徴」(endeixis)は繰り返されていない。また、ここでは、「彼らにとっては」(autois)に対応する「あなたがたにとっては」(hymīn)ではなく、若干変則的な「あなたがたの」(hymōn)が使われて

たには、「キリストのため」という恵みが授けられていますが、それは彼を信じることだけではなく、彼のために苦しむことでもあるからです。30 あなたがたは、わたしに起こったのをおぼえて見、今またわたしに起こっていると聞いている戦いとまさに同じ戦いをしているのです。

2

〈キリストと同じ謙虚な思いを〉

1 だから、キリストにある励まし、愛の慰め、霊の交わり、憐れみと慈しみの心があるなら、それらがどんなものであっても、2 あなたがたは、同じことを思い³⁴、同じ愛を持ち、心を合わせ、一つことを思って、わたしの喜びを満たしてください³⁵。3 利己心によるのではなく、虚栄心によるのではなく、謙虚な思いで、互いに相手を自分よりも優れた者と見なしなさい³⁶。4 各人、自分のことだけでなく、他人のことに[も]一人ひとりが³⁷目を注ぎなさい。

5 このことを、あなたがたの間の思いとしなさい³⁸。これは、キリスト・イエスの内にも（あった）ものです。

6 彼は、神の姿でありながら

神と等しいものであることを固執すべきものとは思わず

いるので、敢えて滑らかに訳していない。なお、「滅び」(apōleia)は、3:19にも出る。

³⁴ ローマ 15:5、参照。

³⁵ 1～4節の比較的長い文章の動詞は、ここで「満たしてください」と訳した plērōsate である。3節の「見なしなさい」も4節の「目を注ぎなさい」も男性、複数、主格形に分詞である。

³⁶ ローマ 12:10、参照。

³⁷ 「各人」としたのは hekastos (男性、単数、主格形)、「一人ひとりが」としたのは hekastoi (男性、複数、主格形)であり、後者は冗語的で文章としてはない方が読みやすい。後者が欠落した写本も、後者を前者に合わせた写本も、逆の写本も見られる。

³⁸ 直訳は「このことを、あなたがたの内に思いなさい」は、Touto phroneite en hymīn の訳。「このこと」(touto)は、直接的には、3～4節の内容。2節同様、ローマ 15:5、参照。

7 むしろ、ご自身を無力なものにして³⁹

奴隷の姿を取り⁴⁰、

人間と同じものとなって、

姿形では人間として現れ⁴¹

8 ご自身を低くして⁴²

死に至るまで従順な者となりました⁴³。

しかも十字架の死に⁴⁴ (至るまで)。

9 それゆえ、神もまた、彼をいと高きところに挙げて

あらゆる名を越えた名を彼に賜りましたが、

10 それは⁴⁵、イエスの名において、

天上の者、地上の者、地下の者すべてが膝をかがめ⁴⁶、

11 すべての舌が、「メシアなるイエスこそ主である」と

賛美して告白し、父なる神を誉め称える⁴⁷ ためです。

〈世にあって光として輝く〉

12 だから、わたしの愛するみなさん、いつもあなたがたが聴き従って

³⁹ 「ご自身を無力なものにして」は、ekenōsen の訳。2 コリント 8：9、参照。この箇所が、後のケノーシス論争の発端となった。なお、ラトケによる “kenoō” の項目『ギリシア語 新約聖書釈義事典 II』教文館、1994 年、337～338 頁、参照。

⁴⁰ イザヤ 53：3, 11, 参照。

⁴¹ ローマ 8：3, 参照。

⁴² ルカ 14：11, 参照。

⁴³ ヘブライ 5：8, 参照。

⁴⁴ この句「しかも十字架の死に」(thanatou de staurou) は、元来の句にある「死に至るまで」(mechri thanatou) の「死」(thanatou, 属格)を自分の神学的理解に適合させるべく、説明的にパウロが、後から挿入した可能性が十分ある。

⁴⁵ 10～11 節は hina 構文で、ここでは、取り敢えず「目的」を表す用法と見なして訳したが、もちろん「結果」として訳すことも可能。

⁴⁶ LXX 訳イザヤ 45：23, ローマ 14：11, 参照。

⁴⁷ 「賛美して告白し、父なる神を誉め称える」は exomologēsētai hoti …eis doxan theou patris の訳。なお、「口でイエスを主と告白し…」(ローマ 10：9) を参照。

いたように、わたしが滞在している時だけでなく、むしろ、わたしがいない⁴⁸ 今こそなおいっそう(聴き従って)、畏れとおのき⁴⁹をもって自分自身の救いを実現しなさい⁵⁰。13 というのは、あなたがたの内において働きながら、(あなたがたの)望みや働きを御意志に適ったものにしてくださるのは、神だからです⁵¹。14 何事も、不平や疑念を持たずに行ないなさい。15 それは、あなたがたが、邪悪で歪んだ世代⁵²のただ中で、非難されるところのない、純真で、傷一つない神の子らとなり、そのような者として、世において星のように光り輝く⁵³ためです。そうすれば、あなたがたは命の言葉を堅く保って、キリストの日に⁵⁴わたしの誇りとなるでしょう。なぜなら、決してわたしが無駄に走ったことにも、無駄に苦勞したこと⁵⁵にもならないからです⁵⁶。17 そればかりか、たとえ、あなた

⁴⁸ 「わたしが滞在している時」は en tē₁ parousiā₁ mou, 「わたしがいない」は en tē₁ apousiā₁ mou の訳。「わたしの滞在時」, 「わたしの不在時」の方が、対比が明瞭ではあるが、硬い。

⁴⁹ 2 コリント 7:15, 参照。

⁵⁰ 「実現しなさい」は, katergazesthe の訳である。「達成しなさい」(フラシスコ会聖書研究所訳), 「達成するように努めなさい」(新共同訳), 「獲得しなさい」(青野訳), 「勝ち取ってください」(本田訳)など。

⁵¹ 13 節は、幾分訳しにくい箇所。「働きながら……にしてください」と訳したのは energōn という分詞(男性, 単数, 主格形)で「働き」と訳した to energein という定冠詞付き不定詞と元の動詞は同じ。それを訳文に表そうと努めたが、そのために to thelein と to energein を「望み」と「働き」と名詞のように訳すことにした。

⁵² 申命記 32:5, 参照。

⁵³ LXX 訳ダニエル書 12:3, 参照。hoi synientes phanousin hōs phōstēres tou ouranou (「分別ある人々は天の星のように輝き」とある。ちなみに、マソラ・テキストの翻訳(新共同訳)は、「目覚めた人々は大空の光のように輝き」。他に、マタイ 5:14~16, 特に、「あなたがたは世の光である。……あなたがたの光を人々の前に輝かせなさい」という言葉を参照。

⁵⁴ 「キリストの日に」は, eis hēmerān Christou の訳。同じ表現が 1:10 にも出ていた。eis ではなく en を伴う類似表現は, 1 コリント 1:8, 2 コリント 1:14, 1 テサロニケ 2:19 を参照。

⁵⁵ ガラテヤ 2:2, 1 テサロニケ 3:5, 参照。

⁵⁶ 「なぜなら」以下は, hoti ouk eis kenon edramon oude eis kenon ekopiāsa の訳。

がたの信仰のいけにえと礼拝のときに、わたしの血がお神酒として注がれる⁵⁷としても、わたしは喜びます、あなたがた全員とともに喜びます。18 だから、同じ様に、あなたがたも喜びなさい、わたしとともに喜びなさい⁵⁸。

〈ティモテオスとエパフロディトス〉

19 さて、わたしはティモテオス⁵⁹を直ぐにあなたがたのところへ派遣しようと、主イエスにあって望んでいます。それは、わたしもあなたがたのことを知って安心する⁶⁰ためです。20 実際、彼と同じ心の者、すなわち、本気であなたがたのことを心配している者は、わたしには(他に)いないのです⁶¹。21 皆が求めているのは、自分のことであってキリストのことではありません。22 彼が確かな人物であることはあなたがたが知っているとおりで、父に対する子どものように、わたしとともに福音に仕えました。23 それで、わたしのことに見極めがつき次第、直ぐに、彼を派遣したいと望んでいるのです。24 しかし、わたし自身もじきにそちらに行けると、主にあって確信しています⁶²。

25 ところで、わたしがしなければならないと思っていることがあります

⁵⁷ 「わたしの血がお神酒として注がれる」は、spendomai の訳。

⁵⁸ 3：1, 4：5, さらに、ローマ 12：15, 参照。

⁵⁹ 使徒言行録 16：1, 参照。

⁶⁰ 「安心する」は、eupsychō < eupsycheō 「安心する、元気づけられる、上機嫌になる」。この単語と 20 節に出る isopsychon (「同じ心の者」) は、いずれも hapaxlegomenon (新約聖書では他には出ない単語) である。また gnēsios 「本気で」も副詞形としては、そうである (形容詞形としてはその限りではない)。

⁶¹ 1 コリント 16：10～11, 参照。なお、ティモテオスに関する情報は、われわれの箇所および注 50 で上げた箇所の他、使徒言行録 17：14～15, 18：5, 19：22, 20：4；1 コリント 4：17, 16：10；1 テサロニケ 3：26 などに出てくる。

⁶² 1：25, 参照。

⁶³ 比較的長い文章である 25 節は、順序を入れ替えて訳するのが普通であるが、ここでは、滑らかさが犠牲になることは承知の上で、可能な限り順序を守って訳してみた。

す⁶³。それは、エパフロディトス⁶⁴、すなわち、わたしの兄弟であり、共に働く者にして戦友であり、また、あなたがたの使者であり、わたしの窮乏の際の奉仕者である彼を、あなたがたのところへ送り返すことです。26 というのは、彼があなたがた全員を慕わしく思っていた⁶⁵ からですし、自分が病気になったことをあなたがたが聞き知ったのを苦にしていた⁶⁶ からです。27 本当に、彼はほとんど死ぬほどの重病を患いました。しかし、神は彼を憐れんでくださったのです。否、彼ばかりでなく、わたしをも憐れんでくださり、わたしは悲しみの上に悲しみを重ねずに済んだのでした。28 こういうわけですから、わたしは大急ぎで彼を送り返すことにしたのです。そうすれば、あなたがたは彼の姿を見て再び喜ぶ⁶⁷ ことができ、わたしもまた一層悲しみが和らぐのです。29 だから、あなたがたは、彼を、主にあって、あらん限りの喜びをもって迎え入れなさい。また、彼のような人々を尊重しなさい。30 なぜなら、彼は、キリストの業のゆえに、死に直面するまで⁶⁸ 命を危険にさらして、わたしに対するあなたがたの奉仕の不足を補ってくれたからです。

⁶⁴ 4:18 に再度出る。

⁶⁵ 「慕わしく思っていた」は、*epipothōn ēn* の訳。1:8, 参照。

⁶⁶ 「苦にしていた」は、*kai adēmonōn* の訳。*epipothōn* と同じく *ēn* を受けて分詞形になっている。「苦にしていました」(前田護郎訳)、「心苦しく思っている」(協会訳, 新共同訳)、「気にしている」(新改訳)、「気に病んでいる」(フランシスコ会訳)、「心を痛めていた」(青野訳) など。

⁶⁷ 「彼の姿を見て再び喜ぶ」は、*idontes auton palin charēte* の訳。*palin* を *idontes* にかけて「彼と再会して喜ぶ」と訳すことも可能。協会訳, 新共同訳, 前田訳, 本田訳, 柳生訳などがこれを支持。フランシスコ会訳, 青野訳が私訳と同じ読み。

⁶⁸ 「死に直面するまで」は、*mechri thanatou ēngisen* の訳。直訳は「死に至るまで近づいた」で、「死に至るまで」(*mechri thanatou*) は、2:6~11 の所謂「キリスト賛歌」(2:8) に出る言葉と同一だが、われわれの箇所と同じ訳語は相応しくない。

3

〈真の義〉

1最後に、わたしの兄弟のみなさん、主にあって喜びなさい⁶⁹。(こうして)同じことをあなたがたに書くことは、わたしにとって煩わしいことではありませんし、また、あなたがたにとっては安全策⁷⁰なのです。2あの犬どもにも注意しなさい。あの邪悪な働き手たち⁷¹に注意しなさい。体を切り取ること⁷²に注意しなさい。3わたしたちこそ割礼ある者だからです⁷³。わたしたちは、神の霊によって礼拝する者⁷⁴、キリスト・イエスに誇りを持つ者、肉に頼らない者です。4もともと、わたしは、肉にも頼り得るもの⁷⁵を持ってはいます。もし、だれか他の人が肉に頼り得る

⁶⁹ 2：18, 4：4, 1テサロニケ5：16, 参照。

⁷⁰ 「安全策」は、asphales の訳。もちろん、意識である。「安全なこと」(協会訳, 新共同訳), 「安全を期すること」(フランシスコ会訳), 「堅固にすること」(青野訳), 「安全のためにもなる」(新改訳), 「安全を守るために必要なこと」(柳生訳), 「より確かになります」(前田訳), 「抛り所になる」(バルバロ訳), 「確認になること」(本田訳) など。

⁷¹ 2コリント11：13～15, 参照。なお、「犬ども」は黙示録22：15に出る。

⁷² 「体の切り傷」は、katatomē の訳。体に施される伝統的な割礼 (peritomē) が実は「体の切り傷」に過ぎないことを主張するパウロお得意の揶揄。もともと「周りを切る」(peritemnō) に由来する「割礼」が、異教的風習と異なるところが無いことを接頭辞の違いで示したものの。続く3節に peritomē (「割礼ある者」) が出る。ガラテヤ5：12も参照。

⁷³ ローマ2：28～29, 参照。そこで、パウロは、「肉に刻まれたものが割礼」ではなく「霊における心の割礼」こそ割礼であると主張している。彼の主張の背景には、申命記30：6；エレミヤ4：4, 9：25；ヨベル1：23などがある。

⁷⁴ 「礼拝する者」は、latreuontes の訳。latreuō は、「神に仕える、神に奉仕する、礼拝する」を意味する。したがって、当然のことながら、「礼拝する」は、シナゴグや聖堂など、特定の宗教施設内で行なわれる「礼拝」行為だけを指すわけでは決してなく、神に仕え、神に奉仕する人間の生活全体を指している。パウロにとっては、使徒として、日常生活全体を神に献げることが取りも直さず礼拝なのである。

⁷⁵ 「頼り得るもの」は、pepoithesis の訳。3節の「肉に頼らない者」(ouk en sarki pepoithotes) に出る分詞と同じく peithō を語源とする名詞。ここ

と思うとしても、わたしの方が優っています⁷⁶。5 (わたしは) 生後八日目に割礼を受けた者、イスラエルの民、しかもベニヤミン族出身の者⁷⁷、ヘブライ人の中のヘブライ人、律法という点ではファリサイ人⁷⁸、6 熱心さという点では教会を迫害する者⁷⁹、律法に基づく義という点では非難されるところのない者です。7 [しかし] わたしにとって利益であったこれらの事柄を、わたしはキリストのゆえに損失と思うようになりました⁸⁰。8 否、そればかりか、わたしの主キリスト・イエスを知っていることの何にも優る素晴らしさのゆえに、すべては損失だと思っています。この方のゆえに、わたしはすべてを失いましたが、(今は)塵芥と思っています。それは、わたしがキリストを得るため、9 また、わたしが彼の内にある者と認められるためです。そのとき、わたしが持つのは、律法に依拠するわたし自身の義ではなく、キリストの信仰による義、その信仰に基づいて神から与えられる義です⁸¹。10 わたしは、この方とその復活の力を知り、また、その苦しみにともに与ること⁸²を知って、その死と同

は、egō echōn pepoithēsīn en sarki という表現。直後に、Ei tis dokei allos pepoithēnai en sarki という表現も出る。

⁷⁶ 「わたしの方が優っています」は、egō mallōn の訳。

⁷⁷ ローマ 11 : 1, 参照。

⁷⁸ 使徒言行録 23 : 6, 参照。さらに、ガラテヤ 1 : 14, 参照。

⁷⁹ 使徒言行録 8 : 3, 9 : 1~2, ガラテヤ 1 : 13, 参照。

⁸⁰ マタイ 13 : 44, 46, 16 : 26, 参照。

⁸¹ ローマ 1 : 17, 3 : 21~26, ガラテヤ 3 : 16, 参照。「キリストの信仰による義」は、決して「キリストへの信仰による義」ではない。「キリストの信仰」は、端的に言えば、「十字架の死」において示された、父なる神の意志に対する子なるイエスの徹底的な忠実さを言う。特に、上記ローマ 3 : 21~26 におけるパウロの議論を参照。

⁸² 「その苦しみにともに与ること」は、[tēn] koinōniān [tōn] pathēmātōn autou の訳。直訳は「彼の諸々の苦しみの享受」。「その苦難にあずかって」(協会訳)、「その苦しみにあずかって」(新共同訳)、「その苦しみにあずかること」(フランシスコ会訳)、「彼の苦しみを共にすること」(前田訳)、「彼の[それらの]苦難に参与する[すべ]」(青野訳)、ただし、原文では [ten] koinōniān (対格) が明らかに、auton や ten dynamin とともに 10 節初めの tou gnōnai (不定詞) と関係するにも拘らず、協会訳と新共同訳は、それを無視して訳している。

じ姿にされ⁸³、11 何とかして死者たちの中からの復活⁸⁴ に達したいのです。

〈目標をめざして進む〉

12 すでにわたしが得たとか、あるいは、すでにわたしが完全な者になった⁸⁵ とかいうわけではなく、むしろ、何とかして捉えよう⁸⁶ と追いつめていっているのです。それは、キリスト〔イエス〕にわたしが捉えられたためです。13 兄弟のみなさん、わたし自身は、捉えているとは思っていません。むしろ、ただ一つのことを、後ろの事柄を忘れ前の事柄に向かって手を差し伸べながら、14 目標目がけて⁸⁷、すなわち、キリスト・イエスにあって(授与される天)上へ召されるという神の賞⁸⁸ を目指してひたすら走っている⁸⁹ のです。15 だから、完全な者ならだれでも⁹⁰、わたしたち

⁸³ 「その死と同じ姿にされ」は、symmorphizomenos tōi thanatōi autou の訳。男性・単数・主格形の分詞 symmorphizomenos は、接頭辞 syn- と名詞 morphē で形づくられた動詞 (symmorphizō) である。これが使われた背景には、「キリスト賛歌」(2:6~11) の6節、7節に morphē が二度出て来るという事情があるだろう。2コリント4:10も参照。

⁸⁴ 「復活」は、exanastasis (<exanistēmi 「立ち上がらせる、起き上がらせる」) の訳。anastasis (<anistēmi 「立ち上がらせる、起き上がらせる」から「復活させる」) と同じ意味で使われるが、ek- という接頭辞がついたこの名詞形は、新約聖書ではここにしか登場しない hapaxlegomenon である。

⁸⁵ 「完全な者になった」は、teteleiōmai の訳。これは、teleiō の現在完了、直接法、中・受動相、1人称、単数。「完全な者になっている」(協会訳)、「完全な者となっている」(新共同訳)、「完全なものになった」(フランシスコ会訳)、「完成した」(バルバロ訳)、「完成された」(本田訳)、「完全にされてしまっている」(青野訳)、「全うされた」(前田訳)、など。

⁸⁶ 「捉えよう」は、katalabō の訳。これは、katalambanō の2 aor. 能動相、接続法、1人称、単数。同じ節に続いて出る katelēmphthēn は、1 aor. 受動相、直接法、1人称、単数。また、13節aに出る katelēphenai は、現在完了、不定詞。

⁸⁷ 「目標目がけて」は、kata skopon の訳。skopos は hapaxlegomenon。

⁸⁸ 「賞」については、1コリント9:24の陸上競技における賞を獲得する勝者の比喩、参照。続く25節には、「朽ちる冠」と「朽ちない冠」が対比されている。

⁸⁹ この13~14節は、比較的訳しにくい箇所。パウロが追いつめてい

はこのことを思っています⁹¹。しかし、もし、あなたがたがこれとは別の思い方をする⁹²ならば、このことをも、神があなたがたに啓示してください。16 とにかく、わたしたちが到達した、そのことに⁹³ 従って進むことです⁹⁴。

17 兄弟のみなさん、あなたがたはみな一緒にわたしに倣う者⁹⁵ となりなさい。また、あなたがたと同じようにわたしたちを模範⁹⁶ として歩いて

(diōkō) 「ただ一つのこと」(hen) は、「目標」(skopos) でもあり「神の賞」(to brabeion… tou theou) でもある。なお、diōkō は、「ただ一つのこと」については「追い求める」が訳語として適切だが、「目標目がけて」(kata skopon) や「…賞を目指して」(eis to brabeion…) については、「ひたすら走っている」の方がしっくりするので、訳文上は後者採った。

⁹⁰ 「完全な者ならだれでも」は、hosoi teleioi の訳。12 節に出て来た teteleiōmai と同根の語であることを訳の上でも表したい。残念ながら、フランスコ会訳は 12 節を「完全なものになった」、ここ (15 節) を「信仰に成熟した者」と訳し分けている。1 コリント 2:6 も参照。

⁹¹ 「思っています」は、phronōmen (<phroneō「考える、思う、思いを抱く、心にかける、念頭におく」) の意識。これは、能動相、接続法、1 人称、複数。「勸奨」を表す用法。

⁹² 「これとは別の思い方をする」は、heterōs phroneite の訳。

⁹³ 「わたしたちが到達した、そのことに」は、eis ho ephthasamen, tōi autōi の訳。tōi autōi は、先行する関係代名詞 ho を受ける。わたしは、15 節 a と 15 節 b に出る touto はどちらも 13 節に出た hen (「ただ一つのこと」) を指すものとして読んでいます。このあたりの文法上の関係も翻訳文に反映させたいと思う。

⁹⁴ 「そのことに従って進むことです」は、tōi autōi stoichein の訳。stoicheō は元々軍隊用語とされ、「兵士が軍隊内部での序列 (stoichos) を守る」、「隊列を組んで整然と行進する」等の意味がある。そこから、「規律を守って生活する」、「規律に従って歩む」を意味するようになったが、「規律」に相当する部分が名詞・代名詞等の与格となる。stoichein は、不定詞形で命令法の代用。

⁹⁵ 「みな一緒にわたしに倣う者」は、symmimētai mou の訳。symmimētai は、一応 hapaxlegomenon であるが、1 コリント 11:1 には、「わたしに倣う者」mimētai mou が、ここと同じ動詞 ginesthe とともに出る。つまり、syn-が付くか付かないかだけの違いである。

⁹⁶ 1 テサロニケ 1:7, 2 テサロニケ 3:9, テトス 2:7, 1 ペトロ 5:3, 参照。

いる人々⁹⁷に目を注ぎなさい。18 というのも、多くの者が、わたしがこれまで何度となく言い、今また泣きながら言っているとおり、キリストの十字架の敵として歩んでいるからです。19 彼らの結末⁹⁸は滅び、彼らの神は彼らの腹⁹⁹、そして栄光は彼らの恥辱にあります。彼らは地上のことを考えているのです。20 (しかし,)わたしたちが属する国¹⁰⁰は天にあり、そこから来られる救い主、主イエス・キリストをわたしたちは待ち望んでいます。21 キリストは、わたしたちの卑しい体を変容させて¹⁰¹、ご自分の栄光の体と同じ姿にしてくださいませ¹⁰²が、それは、万物をご自分に従わせることさえできる¹⁰³その力に基づいているのです。

4 1 こういうわけだから、わたしの愛する、慕わしい兄弟のみなさん、わたしの喜びであり冠¹⁰⁴である愛するみなさん、主にあって堅く立

⁹⁷ 「あなたがたと同じようにわたしたちを模範として歩んでいる人々」は、*tous houtō peripatountas kathōs echete typon hēmās* の訳。直訳は「あなたがたがわたしたちを模範としているのとちょうど同じように歩んでいる人々」であるが、語順等の違いは、ギリシア語と日本語の文法に基づくと考えた方がよい。

⁹⁸ 「彼らの結末」は、*hōn to telos* の訳。*telos* は「完成、目標、終わり、結果、結末」など。ニュアンスとしては、「彼らがそれとは知らずに目指しているゴールは実は破滅なのです」というものか。

⁹⁹ ローマ 16 : 18, 1 コリント 6 : 13, 参照。

¹⁰⁰ 「わたしたちが属する国」は、*hēmōn…to politeuma* の訳。*politeuma* の訳語は「国籍」(協会訳, 新改訳, バルバロ訳, フランシスコ会訳, 前田訳), 「本国」(新共同訳, 青野訳, 本田訳), 「故国」(柳生訳) など。自分がその共同体の一員として所属する国・国家を言う。

¹⁰¹ 「わたしたちの卑しい体を変容させて」は、*metaschēmatisei to sōma tēs tapeinōseōs hēmōn* の訳。*tēs tapeinōseōs* は *hē tapeinōsis* (卑しくされること, 低くされること, 卑賤, 卑賤な状態, 謙遜) の属格だが、価値を表す用法と解し、訳文上はあたかも形容詞のような表現にしてある。

¹⁰² 1 コリント 15 : 42~44, 49, 53, さらに、ローマ 8 : 29, 2 コリント 3 : 18, 参照。

¹⁰³ 1 コリント 15 : 27, 参照。

¹⁰⁴ 「冠」は、*stephanos*。背景にあるのは、基本的にオリュンピア祭における月桂樹の枝の冠とローマの凱旋将軍に贈られる冠で、いずれも勝利と誇りの象徴である。パウロにとって、自分がその礎を据えた各地の信徒たちは、その宣教活動に対する冠であった。「実際、誰が、わたしたちの希望であり喜び

ちなさい。

〈勧めの言葉〉

2 エウオディアにわたしは勧め、シュンテュケにもわたしは勧めます。主にあって同じことを思いなさい¹⁰⁵。3 そうです、あなたにもわたしは願います、真の協力者よ¹⁰⁶、これらの夫人たちを助けてあげてください。彼女たちは、クレメンスとも、わたしと共に働く他の者たちとも一緒になって、福音のためにわたしと共に戦ってくれた¹⁰⁷のです。これらの人々の名前は、命の書に記されています¹⁰⁸。

4 主にあって常に喜びなさい¹⁰⁹。重ねて願います。喜びなさい。5 あなたがたの寛容な心¹¹⁰がすべての人々に知られるように努めなさい¹¹¹。

であり、あるいは諸々の冠でしょうか。——あなたがたでなければ（誰が——）（1テサロニケ2：19）、参照。stephanos については、クラフトによる“stephanos, stephanō”の項目『ギリシア語 新約聖書釈義事典 III』教文館、1995年、313～314頁、参照。

¹⁰⁵ ローマ15：5、参照。

¹⁰⁶ 「協力者よ」は、syzyge の訳。syzygos は「一緒に一つの軛を担っている者」、「協力者」、「仲間」、「同僚」、「伴侶など」を意味する。エウオディアやシュンテュケとは違い、人名ではない。

¹⁰⁷ 「わたしと共に戦ってくれた」は、synēthlēsan moi の訳。ローマ15：30に、synagōgizomai（「共に戦う」）の変化形が、synagōgisasthai moi の形が出る。

¹⁰⁸ 「記されています」は、原文にはない翻訳上の補い。なお、ルカ10：20に「あなたがたの名前が天に書き記されていることを喜びなさい」という文章がある。

また、詩編69：28～29に「彼らの悪には悪をもって報い、恵みの御業に彼らを決してあずからせないでください。／命の書から彼らを抹殺してください。あなたに従う人々に並べてそこに書き記さないでください」とある。

¹⁰⁹ 2：18、3：1、1テサロニケ5：16、参照。

¹¹⁰ 「寛容な心」は、epieikēs の訳。知恵の書2：19、テトス3：2、参照。「寛容」（協会訳）、「寛容さ」（フランシスコ会訳）、「広い心」（新共同訳）、「思いやり」（本田訳）、「柔和」（バルバロ訳）、「善意」（前田訳）、新改訳が「寛容な心」。

¹¹¹ 「知られるように努めなさい」は、gnōsthetō の訳。

主は近い¹¹²！ 6 何事も思い煩うことなく¹¹³、むしろ、万事において感謝を込めた祈りと願いをもって、あなたがたの求める気持ち¹¹⁴を神に向かってお知らせしなさい。7 そうすれば、あらゆる理性を超えた神の平和が、あなたがたの心とあなたがたの考えをキリスト・イエスにあって守ってくれるでしょう。

8 最後に、兄弟のみなさん、すべて真実なこと、すべて尊ぶべきこと、すべて正しいこと、すべて清いこと、すべて愛すべきこと¹¹⁵、すべて評判のよいこと¹¹⁶、また、徳に値するもの、称賛に値するものがあれば何であれ、それらを心に留めなさい。9 あなたがたがわたしから学んだこと、受けたこと、聞いたこと、そして見たこと、それらを実践しなさい¹¹⁷。そうすれば、平和の神があなたがたと共に¹¹⁸いてくださるでしょう。

〈フィリピの信徒の支援に対する感謝〉

10 ところで、わたしは主にあって大いに喜びました。それは、あなたがたがわたしのための心遣いを、ついに再び花開かせてくれたからです。これまではあなたがたに心遣いはあっても、(それを表す)よい機会がな

¹¹² ヤコブ 5：8、参照。内容的には、ローマ 13：11、1 コリント 7：29、2 コリント 6：2b、1 テサロニケ 4：15～17、参照。1 コリント 16：22 に引用されている句「マラナ・タ」(典礼で用いられたアラム語の祈りで「主よ、来てください」、あるいは「主は来られる」の意味)も参照。

¹¹³ マタイ 6：25～34//ルカ 12：22～31、参照。

¹¹⁴ 「求める気持ち」は、ta aitēma の訳。

¹¹⁵ 「愛すべきこと」は、prophilē の訳。prophilē は hapaxlegomenon。

¹¹⁶ 「評判のよいこと」は、euphēma の訳。取り敢えず直訳しておいた。「ほまれあること」(協会訳)、「名誉なこと」(新共同訳)、「ほまれ高いこと」(前田訳)、「定評のあること」(青野訳)、「評判の良いこと」(フランシスコ会訳、新改訳)、「人々に喜ばれること」(柳生訳)、「良い評判になっていること」(本田訳)など。

¹¹⁷ 「実践しなさい」は、prassetē の訳。「実行しなさい」(協会訳、フランシスコ会訳、新改訳、新共同訳)、「実行してください」(本田訳)、「行ないなさい」(青野訳)、「実行に移しなさい」(柳生訳)など。前田訳が「実践しなさい」。

¹¹⁸ ローマ 15：33、参照。

かった¹¹⁹のです。11 欠乏のせいで言うではありません。実際、わたしは自分が今ある状況に〈自ら足る〉¹²⁰ことを学びました。12 わたしは貧窮に甘んじること¹²¹も知っていますし、有り余る豊かさを享受することも知っています。ありとあらゆることに、わたしは秘伝を授けられており¹²²、満腹するすべも、飢えるすべも、有り余るすべも、欠乏するすべも授けられています。13 わたしに力を与えてくださる方の内において、わたしにはあらゆることをする力があります¹²³。

14 とにかく、あなたがたは、よく働いてわたしの苦しみを共に分かち合ってくださいました¹²⁴。15 あなたがたも知っているとおり、フィリピのみなさん、福音の初めに、マケドニアを出たとき、貸借勘定をわたしと共に分かち合ってくれた¹²⁵教会は一つもなかった中で、たった一つの例外があなたがたでした¹²⁶。16 また、わたしがテサロニケにいたときも、一度なら

¹¹⁹ 「よい機会がなかった」は、ēkaireisthe の訳。akaireomai の未完了過去、2人称、複数形。2 コリント 11:8~9, 参照。

¹²⁰ 「自ら足る」は、autarkēs einai の訳。autarkēs は、autos (自分) と arkeō (足りる、十分である) との合成語。名詞形 autarkeia は、ストア哲学のキーワードの一つとして有名である。1 テモテ 6:6, 参照。

¹²¹ 「貧窮に甘んじること」は、tapeinousthai の、次に出る「有り余る豊かさを享受すること」は、perisseuein の、それぞれ意訳。

¹²² 「秘伝を授けられており」は、memyēmai の訳。この myeō という動詞は、元来は密儀宗教用語。パウロは、それを転用したわけで、密儀宗教的含意も残しつつ、元々の「秘儀を伝授された」よりも一般的な表現にした。なお、mysterion (「蜜儀、秘儀、奥義、秘められた計画」等)については、クレマーによる当該項目『ギリシア語 新約聖書釈義事典 II』教文館、1994年、513~516頁、参照。

¹²³ 2 コリント 12:9~10, 参照。

¹²⁴ 1:7, ローマ 12:13, 参照。

¹²⁵ 「貸借勘定をわたしと共に分かち合ってくれた」は、ekoinōnēsen eis logon doseōs kai lēmpseōs の訳。logos doseōs kai lēmpseōs (「貸借勘定、収支決算」)は商業用語からの借用。dosis (「貸し、支払、渡すこと」) < didōmi (「与える」), lēmpsis (「借り、領収、受け取ること」) < lambanō (「受け取る」)。

¹²⁶ 「たった一つの例外があなたがたでした」は、ei mē hymeis monoi の意訳。前後関係、叙述の順序を尊重すれば、思い切ってこのように意識したくなる。

ず二度までも、わたしの必要を満たすためにあなたがたはものを送ってくれました。17 贈り物を欲しがっているではありません。むしろ、わたしが欲しいのは、あなたがたの貸勘定として豊かになった実¹²⁷なのです。18 わたしはすべて受け取り済み¹²⁸で、有り余っているほどです。あなたがたからの贈り物をエパフロディトスから受け取って、わたしは満ち足りています。それは、香しい香¹²⁹、神の心に適った喜ばしいけにえ¹³⁰です。19 わたしの神は、あなたがたの必要をすべて、その豊かさのままに¹³¹、栄光のうちに、キリスト・イエスにあって満たしてくださるでしょう。20 神に、すなわち、わたしたちの父に、栄光が世々かぎりなく（ありますように）、アーメン。

〈結びの挨拶〉

21 キリスト・イエスにあって聖なる人々すべてに、よろしく伝えてください。わたしと一緒にいる兄弟たちが、あなたがたによろしくと書いています。22 すべての聖なる者たちがよろしくと書いています。特に、皇帝の官邸付きの者たち¹³²が（そう書いています）。

23 主イエス・キリストの恵みがあなたがたの霊とともに（ありますように）¹³³

¹²⁷ 「あなたがたの貸勘定として豊かになった実」は、ton karpon ton pleonazonta eis logon hymōn の訳。2 コリント 12：14、ローマ 15：28、参照。この「実」は、経済的援助、支援であろう。

¹²⁸ 「受け取り済み」は、apechō の訳。この単語は、商業用語に由来し、パピルスやオストラカ（陶片）を用いた領収証に使われていることが知られている。

¹²⁹ 2 コリント 2：15、創世記 8：21、29：18、エゼキエル 20：41、参照。

¹³⁰ 「神の心に適った喜ばしいけにえ」は、thysiān dektēn, euareston tōi theōi の訳。dektos, -e, -on（「喜ばれる、歓迎される」）も、euarestos, -on（「喜ばれる、好ましい、気に入る、心に適う」）も、よく似た意味。イザヤ 56：7、ローマ 12：1、1 コリント 10：18、ヘブライ 13：16、参照。

¹³¹ 「その豊かさのままに」は、kata to ploutos autou の訳。kata を「一致して、合致して、適って」の意味と取って意識した。

¹³² 「皇帝の官邸付きの者たち」は、hoi ek tēs Kaisaros oikiās の訳。1：13、参照。

¹³³ ガラテヤ 6：18、参照。